

東アジア中世女性神話に関する一考察

田中 洋子

朝鮮半島の文化を専門となさる拓殖大学村上祥子助教授の拓殖大学英雄研究会の発表「韓国における巫祖神話の英雄譚的視座」(2002・7・26)によって、バリ公主伝説を知ることができた。その時、どこかで聞いたような伝説であるとの印象を受けた。それは、この伝説に酷似した「觀音伝説」のことである。この研究はバリ公主伝説と中国の觀音説話の類似性に注目し、そのうえで日本の中世神話の中の女性主人公との比較を試みようとするものである。

1-1 バリ公主説話

この伝説は朝鮮半島の広範囲にわたって、葬儀のときに巫女によって詠しられる唄いもの一種で(クツ)、各地域によって差異はあるが、大綱は以下のようなものである。バリ公主説話を分析する『朝鮮の祭りと巫俗』(注1)を参考にしてまとめてみる。

朝鮮王には男子がいなかったが、王妃がまた妊娠した。ところが生まれたのは息子ではなくまた娘だった。(七人娘の末娘とか九人娘の末娘とかいろいろなバリエーションがある。)王は怒って娘を箱に入れて海に流す。このままでは死を待たただけだった娘の入った箱を亀が背中に乗せてある海岸に運んだ。箱を拾った夫婦が娘を養育する(山神とも竜王ともいわれる)。一方、実の父母である王と王妃は子を捨てた罰で病におかされた。この病をいやすには盪山の中にある泉の水(薬水)を飲まねばならない。捨てられなかった娘たちは水を取りに行くことを拒んだ。捨てられた娘は身分をあかし、王に見いだされた後に一身を賭して、盪泉に水を取りに行くことにした。山への道には苦難が満ちており、娘は苦難の末、ある神と結婚して子供をもうけた末にやっと水を得て王のもとへ帰る。ところが父母はもう死んでいた。薬水を飲ませると両親は死からよみがえって、彼女は巫神となる。

この後、神になったバリ公主は死霊を極楽へ連れていくといわれ、これから死者を極楽へ連れて行ってくれるようにという意味で、この説話が葬儀の際に語られるのである。(注2)

1-2 バリ公主説話の語素

バリ公主のバリとは「捨てられた」という意味だそうだが、ここでバリ公主説話の語素をあげてみよう。村上氏の発表のまま、ここに引用する。

朝鮮王の娘・望まれない誕生・胎夢・箱に入れられて捨てられる・亀が背中に乗せる・養育者に会う・両親の病・薬水を飲ませる・両親を生き返らせる・巫神となる

2-1 香山伝説

香山とは中国・河南省汝州香山のこと。この山の白雀寺の千手千眼観音の縁起として語られているのが妙善というヒ

ロインの伝説である。ヒロインの名を取って「妙善説話」といわれることもある。

『観音麥容譚』（彌永信美・法蔵館・2002）に引かれた過去の論文の中にこの伝説を要約した文章があるのでそれをみよう。

妙莊王の三女のうちの末娘妙善が、父王の命に背いて結婚を拒否し、汝州白雀寺の尼となった。父王は怒って寺を焼き、諸尼を殺し妙善をも殺してしまった。殺された妙善は冥界に入ったがついで蘇生して仙人から仙桃をもらい、香山に入って修業した。たまたま父王が悪疾で療法もなく苦しんでいるのを、自らの手と眼（千手千眼観音すなわち大悲観音の信仰であることがわかる）を与えて病を治し、成道して観世音菩薩となり、王を始め一門や臣民を帰心せしめた。（塚本善隆「近世シナ大衆の女身観音信仰」より）

2-1-2 香山伝説の要素

1と同じく香山伝説の要素を取り出してみよう。

王の娘・父との葛藤・苦難・蘇生・父の病・薬を与える・父を生き返らせる・観音として現れる

2-1-3-1 香山伝説の流布

香山伝説を記した最古の記録は1100年ころ北宋の徽宗の寵臣・蔡京筆の石碑であると伝えられる。現在、杭州天竺寺に「香山大悲成道伝碑」（1104年銘）があるが、原碑かどうかは定かではない。（注3）

現存する記録としては南宋の祖秀著『隆興仏教編年通論』（1164）のものが最も古い。（注4）この記事は高僧・道宣律師の伝記の一部として書かれているが、その内容は律師の生涯とは関係なく、無理に当てはめられたような感

じがする。(注5)

元から明にかけて宝巻としてまとめられていった。明の万曆年間にもまとめられた『觀世音修業香山記』『香山玉巻』などがある。その後、清代になっても張官著『海潮音』などの小説や大型灯彩劇としての実演記録のある『大香山』もあり、大衆文芸・演芸として広い支持を受けたことがわかる。また、北京の大慧寺の大悲殿には妙善伝説にもとづく壁画がある。ほかにも近代の『南海觀音菩薩出身修業記』などの著作が香港・台湾でも仏教徒の作善としてもおこなわれていた。(注6)

私事になるが私も二十年前、邦訳された「觀音菩薩伝」を読んだ覚えがある。香港の寺院の本を邦訳したものと思われる。現代でも香港・台湾の仏教徒の篤い信仰を集めているのだ。ではここに出る「玉巻」とはどのようなものか、それをみておきたい。

2-13-12 宝巻とは？

唐代になると仏教はますます繁栄し、大衆に対する説法も盛んに行われていた。説法は俗講とも称され、これが盛行していたことは日本の入唐僧・円仁の『入唐求法巡礼行記』にお長安の有名な俗講法師の名を記していることからわかる。

俗講を本にまとめた話本もつくられたが、これを変文という。変文は敦煌から多量に見られ研究が進んだ。変文を市などで読み上げることも盛んに行われたようで、北宋の真宗(998-1020)は変文の講唱を禁止している。民衆が集まることへの恐怖がその真意であろうが、みだらがましいことを大衆に講説しているという口実であった。それだけ人気のある芸能だったことがうかがわれる。

変文の講唱は禁止されたが、説法芸能がなくなってしまうわけもなく、講經という形で大衆への仏教的談義は続いた。このような談義を本にしたのが宝巻である。やがて仏教的談義だけでなく民間説話・道教説話のようなものも宝巻となり、民衆の集まる場所で語られたり、民衆文学として発展していった。現行本では『香山玉巻』が最古のものと考えられ、伝説では徽宗の崇寧二年(1103年)普明禪師の作といわれているが史実とは思われない。宝巻は現在でも河西

などでは村々に伝わっていたのが発見されている。文化大革命期間も大事に隠されていたもので、民衆の宝巻に寄せる愛を知ることができる。

香山伝説が宝巻になって流布していることは、香山伝説がいかにも中国民衆に愛され支持されてきたかの証ともいえる。(注7)

3-1 日本・中世神話

中国で妙善伝説(香山伝説)ができ、香山の観音の新しい「神話」が形成された後にも、明代に馬郎婦観音・魚籃観音などの観音「神話」ができた。これが、中国の中世民衆仏教の特徴だとすれば、日本の中世にも新しい民衆宗教「神話」が成立していた。中世は鎌倉仏教の成立など日本史のなかでも宗教的な時代とされているが、神道の方でも新しい動きが起きた。伊勢神道・吉田神道などという反本地垂迹説に立つ神道説については思想史でつとに注目されて来たところだ。が、ここでいう新しい「神話」とは歩き巫女や比丘尼などが民衆に語って歩いた神社・寺院の縁起を中心とする「中世神話」である。

古事記・日本書紀などに書かれた神話をオースドックスな日本神話とするなら、この中世神話はまったく異端的な神話といつていい。登場人物といえは、天竺の人あり、中国の人あり、それが最後は○○神社の祭神になるといふ具合で、日本神話は著しい変貌をとげている。神仏は習合し、俗信が混入し、新しい神が参入している。「縁起物」「本地物」と一般にいわれているこれらの神話は、今までは俗信・民衆信仰として軽視されてきた。近年になって歴史学・思想史・美術史などと学際的研究が広がってきて国文学の分野でも研究成果が上がっている。

3-2 中世神話の英雄像

中世神話の主人公は、多くはオースドックスな神話の主人公とはまったく違う。いろいろな主人公がいるが、その主人公たちは新しい英雄だったといえよう。その人物像をひとつくりすることは難しいが、目につく特徴としては次の

ような点があげられる。

望まれた出生・罪なき苦難・自らの犠牲・救済・神となる

有名などころでは天神説話・曾我物語・軍士の穴草子などがこのパターンの典型的な例である。これらの主人公は男性であり、物語も男性的で勇壮なものであるが、では主人公が女性の場合はどうだろうか。ヒロインが苦難の末に神になる、というパターンは先に述べたバリ公主説話・香山伝説と一致するものであるが、日本の中世神話でこのようなものがあるのだろうか。そして、その違いはどんなものなのだろうか。

3-3 女性主人公の苦難

日本の中世神話を集めたものに『神道集』があるが、それに収録されていない中世神話も多い。今、それらの中で女主人公（ヒロイン）が神になるものを見てみると、いくつかの物語が当てはまる。「かひこ」「熊野の本地」「ふせやの草子」などがそれに該当する。そのうち「かひこ」のあらすじを見ておこう。

北天竺・きうちうこくの大王には娘が一人いた。母が早く死んだので父王は後ぞえを迎えた。娘はこの継母の憎しみを受け、山や島に流される。そのたびに奇跡が起き、父王のもとへ帰ることが出来たが、とうとう王はこのまま継母の憎しみに苦しむよりはと、「うつほふね」に娘を入れて外国へ流す。父王はその海のほとりの庵に世を捨てて死んでしまった。夫婦は娘の体唐櫃に入れて守るが、夢に我に食を与えよという娘の言葉を聞き、唐櫃を開けてみると娘の死体はなく、小さい虫がいた。これが蚕の始まりである。

さらに欽明天皇の皇女・かぐやひめがこの娘の生まれ変わりであり、富士山に神とあらわれ、富士と筑波の神は一体

であるとかの後日談があるが、それはよいだろう。

これらの物語の話を抽出してみると次のようになる。

望まれた出生・継母の讒言・苦難・神になる

それぞれの話でバリエーションはいろいろだが、親との縁が薄い点、苦難を経て神になるという点は共通項といつてよいだろう。

4-1 まとめ

① バリ公主説話と香山説話の類似

ともに「ヒロインの苦難と自己犠牲による救済」のパターンを持ち、なおかつ非常に「家」の、もう少し言うと「親」の位置が重い。そして両者とも民衆信仰の中で生き続けた伝説であるといえる。(注8)

② 日本の中世神話との比較

時代的にはほぼ同じ頃、日本の民衆に語られていた神話の苦難のヒロインたちは「ヒロインの苦難と自己犠牲による救済」という点では大陸の伝説と軌を一にしているが、いくつか違う点もある。

まず大陸の伝説では、苦難の始めは親との葛藤にある。この親は姫の実の両親であるが、日本では苦難の原因は継母であることが多い。または親の了解を得ない恋の場合もある。

また自己犠牲による救済という大枠は変わらないが、その救済対象も違う。大陸の場合は親(両親ないし父)の病苦を救うのであるが、日本のヒロインは身を犠牲にして恋人・子供・救ってくれた人を救うのである。ひいてはそのよう

な人を通して民衆を救う。ここには親に対する報恩・孝はまったく捨てられている。大陸と日本における孝行という徳目、ないしは儒教倫理の受け入れの程度の差が現れているのではなからうか。また孝行が強調される社会イコール孝行が完全に行われている社会とも限らない。規範の縛りが緩んだ中世に孝行を至高のものとする説話が民衆教化の一環として語られた、ということも考えねばなるまい。

③ 民衆信仰の中に息づくヒロインたち

ここに見られたようなヒロインたちは神と祭られてからは、いづれも民衆の篤い信仰を得ている。民衆の信仰とは決して難しい形而上孝・哲学・神学的信仰ではない。現世利己的信仰を多くはらみながら、来世の幸福をも得ようというのである。拓殖大学のインド学専攻の坂田貞二先生のご教示によれば、インド世界でも女神は現世利己的信仰を得ているということである。

中世東アジアの民衆のヒロイン観・世界観・救済観などを通じて中世民衆の持つエネルギーや弱者に対する共感を知ることができるよう思われる。まだまだ考察の足りないところも多いと思うが、ここで一旦、筆をおくことにしたい。末になったが、この研究に端緒を作ってください、発表のチャンスを与えてくださった拓殖大学英雄研究会の諸先生に厚くお礼を申し上げます。

注1 崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』第一書房 昭和55年 P190～191

2 前掲書 P149

3 張総『説不尽観世音』上海辞書出版 2002年 P110

4 尹飛舟『中国古代鬼神文化大観』百花洲文艺出版社 1992年 P80他

5 注3と同書 P111他

卷末参考文献参照

中国仏教協会編『中国仏教漫談』江蘇古籍出版社 1996年 P162~166
 村上先生のご教示によると、元によって朝鮮が占領されていた間に両国知識人間の交流があったことも考慮する必要があるということである。

参考文献

- 崔吉城『朝鮮の祭りと巫俗』第一書房 昭和55年
 彌永信美『観音変容譚』法蔵館 2002年
 貴志正浩訳『神道集』平凡社 東洋文庫94 1967年
 横山重編『神道物語集』古典文庫 昭和36年
 近藤喜博『中世神仏説話』『同続』『同続々』古典文庫 昭和25・30年
 桜井徳太郎他編『寺社傳起』岩波書店 日本思想大系20 1975年
 中国仏教協会編『中国仏教漫談』江蘇古籍出版社 1996年
 百花洲文芸出版社『中国古代鬼神文化大観』 1992年
 孫昌武『文壇仏影』中華書局 2001年
 羅偉国『説話観音』上海書店出版社 1998年
 万寿和『河西宝卷真本校註研究』蘭州大学出版社 1992年
 唐世貴『観世音』巴蜀書社 2002年
 劉錫誠他編『観音信仰』中華民俗文集 学苑出版社 1994年
 張総『説不尽の観世音』上海辞書出版社 2002年